

発表会 客席参加型で盛り上げよう!

2

メドレー演奏



赤羽美希さん(左)と正木恵子さん

みんなが 心待ちにする 名物コーナー

インタビュー・文：森川玲名

東京・早稲田に、幼児から大人まで幅広い層の生徒さんが通う音楽教室「深見友紀子ミュージック・ラボ」がある。京都女子大学発達教育学部の教授も務めながら、同教室を主宰する深見友紀子先生は、即興演奏のコーナーを織り込むなど、独自のアプローチで発表会を開催している。先生は、どのように発表会を作り上げているのだろうか。

深見先生と、発表会を大いに盛り上げている「即興からめーる団」の赤羽美希さん(音楽パフォーマンス)、正木恵子さん(打楽器奏者)に話をうかがった。



弾きたい曲を弾く!

92年に設立された「深見友紀子ミュージック・ラボ」は、「鍵盤でできることには何でも実験的に挑戦しよう!」との想いから「ラボ」と名づけられた。現在、深見先生、赤羽さんを含む4人の講師が所属し、ピアノで演奏できるあらゆるレパートリーに対応。しかも、電子楽器や鍵盤ハーモニカ、打楽器などもレッスン室に置かれていて、それらの楽器とも気軽に触れあえる環境が整っている。

深見 ミュージック・ラボでは、音楽の「読み・書き」力はもちろんのこと、高度な芸術表現力まできちんと身につ

けることができるように、異なる得意分野を持った講師を揃えてレッスンに臨んでいます。もちろんソナチネなどのクラシック教本の定番も使用していますが、他に1曲、ポップス系の曲などを“お楽しみ”としてやるようにしているのも特徴のひとつでしょうか。

この2本立てのレッスンで学んだことの集大成にもなっているのが、「ピアノパーティ」とネーミングされた発表会。

深見 日ごろの成果を披露する場であることは通常の発表会と同じですが、ミュージック・ラボでは、生徒自身が弾きたい曲を演奏します。発表会を生徒ひとりひとりの表現の場にしたいので、出番を2回作り、最低でも2曲、基本はクラシックとポップス系の作品を演奏しています。でも、



ミニライブで鍵盤ハーモニカを演奏する子どもたち、講師陣（右端が深見友紀子先生）

子どもによっては2曲ともクラシックという場合もあります。映画、ミュージカル、CMなど、選曲の幅が広いので、時にはやりたい曲の楽譜が出版されていないこともあります。でも、今はインターネットなどで音源のほとんどを聴くことができますから、その子のレベルにあわせて、私や赤羽さんがアレンジをしたり、新しく楽譜を作成しています。



当日演奏した曲が メドレーになって 再登場

その赤羽さんが講師を務めるようになったのは、深見先生と共通の知人だった鍵盤ハーモニカ奏者で作曲家の野村誠氏に紹介されたからだという。

赤羽 打楽器を専攻している正木さんとも、野村さんを通じて知りあい、一緒に即興演奏するようになりました。

正木 そして、ミュージック・ラボでの赤羽さんのレッスンを見学させてもらったことがきっかけで、深見先生とも知りあうことができたんです。

赤羽さんと正木さんは個々に活動しながらも、2006年5月からミュージック・ラボで、子どもたちを集めて月1回のペースで即興演奏のワークショップ、「即興からめーるワークショップ」を開催。

深見 それぞれのピアノ演奏技術のレベルを気にすることなく、生き生きとワークショップに参加している子どもたちの姿を見て、彼女たちのパフォーマンスで全員が楽しめるプログラムを発表会に取り入れてみてはどうだろうかと、思いついたんです。2006年6月の発表会から、2人の即興演奏コーナー「今日のメドレー」を新たに加えました。

当日、子どもたちが披露した曲すべてを、赤羽さ

んと正木さんが、ピアノ、鍵盤ハーモニカ、アイリッシュハープ、打楽器などを使いながらメドレーで演奏していくのだが……。

赤羽 1回目はワークショップみたいに子どもたちと一緒に演奏する場面を入れて、2回目は普通のコンサート・スタイルでやりました。でも、曲をただ並べるだけではなく、例えば新郎新婦入場！みたいな感じで登場して、『オペラ座の怪人』の演奏で新婦を奪われて……といったストーリー性のある流れにしてみました。

深見 3回目の出演となった昨年7月の発表会では、夏休み直前の開催ということで、「9月になったら、また遊ぼう！」というセリフを織り込むなど、いつも子どもたちの側に立ったコーナー作りをしてくれるんですよ。

回を重ねるごとにその内容は練り上げられ、より充実したものになっている。では、本番までのプロセスは？

赤羽 3回目のときを例にすると、まず、できるだけインパクトのある登場をしたいと思っているので、プログラムを見ながら、それにふさわしい1曲を選びます。

正木 『ウルトラセブンのテーマ』がいいということになって、それを鍵盤ハーモニカで演奏することにしました。そして、今度はその伴奏型を残したまま、『ドラえもん』の曲へと繋げたくんです。

赤羽 切れ目なく続けるだけではなく、2曲を組み合わせて1曲にして演奏するなど、子どもたちが飽きない工夫をしています。メドレー全体をひとつのパフォーマンスとして楽しめるように、楽器も、「そろそろピアノの音を入れようか」とか、「ここは打楽器で盛り上げて」とかアイデアを出し合いながら選んでいます。

正木 そうやってほしいの枠組みは決めておきますが、当日の子どもたちの反応を見て、テンポをゆるめてわざともったいぶってみる、楽器を手に客席の中へ入っていく……といった感じで、自由に変化をつけています。

クラシック作品を演歌調にアレンジしたり、コントを交えたり、笑いの要素も満載。しかも、次は誰の曲を演奏するかわからないという予測不能な展開に、子どもたちはワクワクドキドキ！ 曲によっては手拍子で参加する場面も。

深見 そのアイデアの豊富さには、いつも感心させられます。

赤羽 会うたびに生徒たちから訊かれるんですよ。「またやるの？」とか「ぼくの曲は何番目？」とか（笑）。



昨年7月の「ピアノパーティ」より。発表会は、アンサンブル演奏の魅力に触れる絶好の機会。

発表会では好きな曲を選べるとあって、家族からのリクエスト曲を演奏する子どもも少なくないとか。音楽を通して家族のコミュニケーションが取れるのは、何よりすばらしいこと。



既成概念を捨てる

「今日のメドレー」コーナーを設けたことによる、音楽に対する子どもたちの意識変化は？

深見 まず、生徒たちの鍵盤ハーモニカの吹き方が違ってきました。赤羽さんと正木さんのパフォーマンスを見たことで、机の上に置いて演奏する楽器ではなく、踊りながら弾いてもいい楽器だと気づいたようです（笑）。鍵盤ハーモニカに対するイメージが変わったのは、大きな収穫でした。また、「今日のメドレー」だけでなく、2人には子どもたちとのアンサンブルにも協力してもらっています。合わせの段階で、生徒たちが対等に意見交換することで、彼らは自分がひとりの“ミュージシャン”として扱われたと感じる。それが、いろいろなことに挑戦しようという意欲

に繋がっていくんですね。

もうひとつ、いいアーティストのいい演奏と身近に触れる大切さも実感しています。やはり学校教育の範囲内では、楽器の魅力を十分に伝えきれないところって、ありますよね。

子どもたちに、より豊かな音楽体験をさせたいと？

深見 ピアノ教室ですので、演奏技術の上達は大前提です。しかし、子どもたちが大人になったときに主流となる職業は、例えば私の子ども時代にはIT産業が存在しなかったように、現在、この世にないものだと思うんですね。だから、“ユニークな人に会った”“初めてのものを見た”といった経験を通じて視野を広げ、柔軟な発想力や、できれば時代の先を読む能力を身につけられるようなピアノ教室でありたいと思っています。

「今日のメドレー」が発表会の活性化に繋がったのは、明らかです。ご家族の方から「『今日のメドレー』を楽しみに発表会に来ました」と言われたこともあります。お客様を無視した発表会が、子どもたちに喜びや充実感をもたらすはずがありません。これからも、出演者とお客様が、ともに楽しめる発表会を目指してまいります。

「即興からめる団」の赤羽さんと正木さんが、出前演奏します！

■あなたの教室の発表会にも「今日のメドレー」コーナーを作りませんか？

詳細： <http://www.ongakukyouiku.com/music-lab/improkarama/index.html>

問合せ： improkarama@ongakukyouiku.com

「ピアノパーティ」の様子は、以下でもご覧になれます。

深見友紀子ミュージック・ラボ： <http://www.ongakukyouiku.com/music-lab>